

長崎華僑における社会組織の歴史と変遷

坂本夏実

1. はじめに

長崎華僑に関する先行研究を調べてみると、その内容は経済と歴史を中心に行われていた。しかしこれらの研究において、現在の長崎華僑の社会組織における詳しい内部状況については研究されておらず、今後それらの組織がどのような方向に進んでいくかは明確にわかっていない。よって本研究の目的は、長崎華僑の社会組織の歴史と変遷の様子を見ていながら、それらの歴史からみられる長崎地域社会における華僑の特徴と、彼らの形成する社会組織が現在どのような役割を持っているかを明らかにすることである。さらにこれを踏まえたうえで、今後の長崎華僑社会において社会組織がどのように機能していく可能性があるのかを検討していく。

なお、本研究の研究方法は文献調査と聞き取り調査である。文献調査では長崎の華僑に関する歴史と現状、彼らが形成する主な社会組織、ランタンフェスティバルなどの観光の面で長崎華僑が地域社会へ与える影響について調べる。また、長崎新地中華街とその周辺で働く華僑や、長崎市に住む新華僑に聞き取り調査を行い、長崎華僑の社会組織の役割とその現状をはじめ、先行研究では取りあげられていなかったことを明らかにする。

2. 長崎華僑社会の歴史

2.1 「華僑」の定義

本研究では[王, 2001]にしたがって華僑の定義を「国籍を問わず、国外に私的かつ永続的に居住する中国人及びその子弟・子孫によって構成される、中国との関係を維持するエスニック・グループ」及び「エスニック・グループの華僑社会（集団）へ帰属意識を持つ人」とする。

また、80年代に来日した華僑は「新華僑」、それ以前から日本に在住する華僑は「老華僑」と呼ばれ区別される[張, 2007]

2.2 江戸時代の長崎華僑の歴史

長崎華僑のルーツは江戸時代に形成された。江戸幕府は1641年に唐船とオランダ船以外の外国船の渡来を禁じ

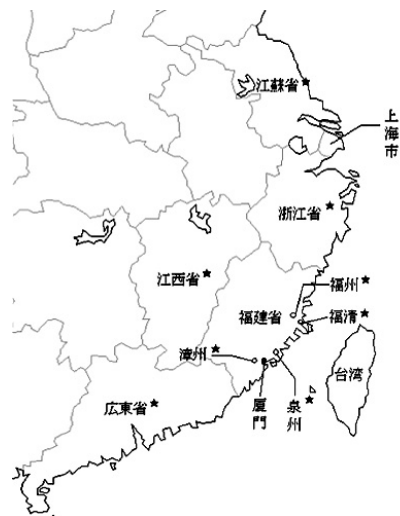


図1 長崎に定住した華僑の出身地

(注1) [中村 [online:www.craftmap.box-i.net/](http://online.www.craftmap.box-i.net/)] をもとに筆者が作成

(注2) 付きの地域が長崎に定住した華僑の出身地

て鎖国を行い、日本国内では長崎が唯一貿易を許された〔譚・劉，2008〕。禁教政策がとられていたため、三江、福建、広東からやってくる中国人は、自らがキリスト教徒ではないことを証明するため、出身地ごとに集まり媽祖を祀る寺院を建てた。彼らは4つの寺を中心に同じ出身者同士の相互扶助組織である「幫」を形成した。現存する唯一の幫である三山公幫のもととなった福州幫は1629年に創設され、1850年に福建幫になった。彼らは幫の中で、日本での生活のために助け合いながら同郷連帯意識を強めていった〔王，2001〕

1689年、密貿易防止のために長崎郊外の官有地に唐人屋敷が作られ、それまで市中に分宿していた華僑たちはそこで生活することを強いられた。中国人は唐人屋敷を舞台に独占的な貿易を行い、多くの富を得て栄華を極めた。

「日本三大中華街」として長崎よりも大規模な中華街を持つ横浜も神戸も、華僑が住み始めたのは鎖国令撤廃後である。長崎華僑の歴史は両港と比べて格段に古いのである。

2.3 明治時代～日中国交までの長崎華僑の歴史

1870年の火災によって唐人屋敷は撤廃され、住む場所を失った長崎の華僑たちは、現在の新地に移り住んだ。1871年の日清修好条規を機に長崎以外の港が開港され、長崎は貿易の特権を失う。長崎に根を下ろし貿易を行っていた華僑はもちろん、その後長崎にやって来た華僑も関西など他の地域に進出していったが、雑貨業や小売業を営んでいた福建省北部出身の華僑たちは長崎に残った。

第二次世界大戦後は華僑の服装の変化、伝統的な中国の建物の崩壊、華僑人口の減少等により、日常生活の様式における日本社会への同化が進行した。こうして1960年代から80年代の新地は数件の中華料理店、雑貨屋、貿易会社があるのみで、江戸時代から続いてきた中国人居留地としての性格をなくしていった。



図2 長崎略図
(注)〔王，2001〕より転載

2.4 日中国交回復以後の長崎華僑

1972年の日中国交回復後、日中友好の動きが全国的に盛んになってくる。この流れを受けて「長崎新地中華街（以下新地中華街とする）」が誕生することとなる。

戦後、新地には中国風のものがほとんどなかった。華僑は新地を活性化させるべく、1984年に「長崎新地中華街商店街振興組合（以下商店街振興組合とする）」が組織された。この組織内で、華僑と日本人が共にまちづくりを行い、市とも協力して大規模な建設や改造を行い、新地は新地中華街へ生まれ変わった。

さらに商店街振興組合の組合員は、失われていた春節と元宵節を復活させ、それをテーマにした灯笼祭を実施した。その後、灯笼祭は長崎市との協力により1994年からランタンフェスティバルと名前を変え、現在は長崎の観光に大きく貢献している。このように、日本人社会と同化して

いた長崎華僑は、日中国交回復を機に、事業を成功させるため中国文化の創造を図ったのである。

3. 近年における長崎華僑の暮らしの変化

3.1 新地から進出する長崎華僑

本国から日本にやって来た1世代の時代は、日本社会は華僑に対して閉鎖的であった。1世代の子である2世代は、高学歴者が多いにも関わらず官庁や大企業への就職が難しかったため、長崎に戻り家業を継ぐしかなかった。しかし、1972年の日中国交正常化によって起きた中国ブームの影響で、多くの華僑が事業に成功するようになった。3世代になると中国人を雇用する企業が増加し、金融機関が中国人企業への融資を行うようになったために彼らの事業の拡大は容易になり、経済的な成功者が増加していく。江戸時代から長崎地域社会にしか受け入れられることなかった華僑たちは長崎から飛び出し、日本人社会全体に進出できるようになったのである。

3.1.1 居住地の拡散

長崎在住の華僑に関しては、新地とその周辺に居住する傾向があった〔阿部, 1996〕。1961年の時点では、華僑の居住空間は新地とその周辺のみだが、1981年の時点では、長崎市全体に拡散している〔阿部, 1996〕(図3, 4)。前節で述べたように、長崎華僑が日本人地域社会へ進出していることがその原因である。

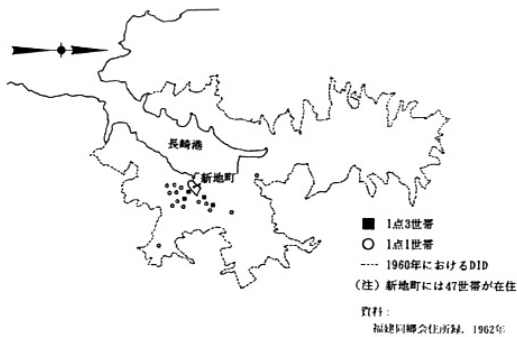


図3 長崎市における福建省出身華僑の居住地
(1961年)
(注)〔阿部, 1996〕より転載

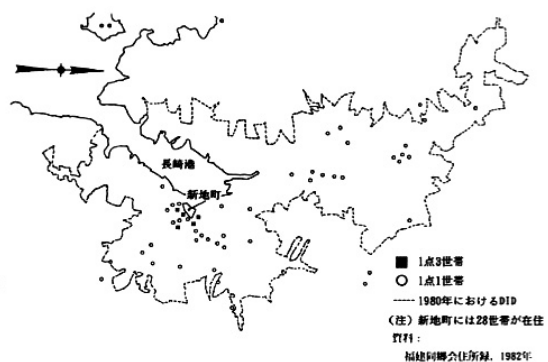


図4 長崎市における福建省出身華僑の居住地
(1981年)
(注)〔阿部, 1996〕より転載

独立や事業の拡大を行う者もいた2世代の華僑は新地にこだわることなく住宅を選択できるようになり、図6のように長崎市全体に居住範囲を広げた。3世代になると企業に就職をする者も出て来たため、長崎県外に移動する者が増えた。

3.1.2 日本国籍取得者の増加

年々、日本国籍を取得する、つまり「帰化」する華僑が増加している。手間がかかるにも関わらず帰化を希望する理由も、公務員になるため、海外出張に便利な日本のパスポートを取得する

ためなど、前述したような華僑の社会進出が根本にある。

長崎市内の私立大学の教授でもあり長崎新華僑華人協会の会長も務める劉震さんに、華僑の日本国籍取得について訊ねるとこのように答えた。

中国国籍のままの新華僑も沢山いるけど日本のパスポートは便利だから帰化する新華僑も多い。どの国の国籍を持つかは本人の自由だしその人自身には関係ないと思う。

新華僑に聞き取り調査を行った結果、劉氏と同様、彼らのほとんどに国籍に対し特別な意識を持っている様子は見受けられなかった。しかし、老華僑に対する聞き取りでは少々異なる結果となった。半分の老華僑は新華僑と同じく国籍取得の利便性を評価していたが、もう半分の老華僑は少々批判的な考えを持っており、特に2世までの年配の老華僑がこのような考えを持つ傾向にあった。老華僑2世の男性はこのように語っていた。

息子は公務員になるために、もう1人の息子は便利だからと言って日本国籍を取った。華僑の、中国人としての誇りはどこにいったのか。帰化してしまった人間なんか華僑ではないじゃないか。(70代, 男性)

日本国籍を取ると、どこか遠慮してしまって、先祖が残してきてくれた中国文化を皆で傳承していこうという意識が薄くなるような気がする。(50代, 男性)

2世の老華僑は努力をして経済基盤を作った1世に対する感謝の念が強く、その想いが自分たちの民族意識を高め、国籍に対しても特別な感情を抱いている。しかし日本社会への同化が進んでいる3世に関しては国籍に対する拘りはほとんど見受けられなかった。これからは新華僑、老華僑ともに、帰化する華僑がますます増加していくであろう。

3.2 社会組織が果たす役割の希薄化

現在老華僑が主だって活動をしている組織のほとんどが構成員を減少させており、活動内容も希薄になってきている。長崎華僑社会において重要な位置を占める三山公幫も例外ではない。三山公幫は、2.2で述べた1629年に創設された福州幫を前身として1850年につくられた福建幫を1899年に再組織したものである。同組織が主催する結婚式は福建会館で中国衣装を着用して挙げ、葬式では厄除けのために中国伝統の爆竹を鳴らすなど、以前はどちらも中国式のものが行われていたが、現在では会場も内容も日本式で行われる。三山公幫は、現在は崇福寺の管理とそこで行われる祭祀の維持を行う組織としてのみ機能している。三山公幫が主催する式の変化について、新地中華街周辺で中華料理店を営む老華僑の2人はこう話していた。

私はお見合い結婚で県外から嫁いできた。私たち2世のときは、日本人と結婚することは勇気のいることだったから。知り合いの華僑同士でお見合いして、中国式の式を挙げた。今

みたいに日本人と結婚する人が出てきたのは3世から。日本人と結婚するとなると向こうの事情もあるだろうし、中国式の式は挙げにくい。(70代, 女性)

彼女の話から、華僑が日本社会から受け入れられるようになった3世の時代から日本人との結婚が増えたこと、そのため中国式の式を行う機会が減ったことがわかる。

昔は中国式の結婚式や葬式に対して、「時代にあってないけど先祖が続けてきたんだからそうすべき」という意識があった。でも今は日本国籍を取ってしまった人も多いし、中国文化を守っていくことに対して遠慮があるんじゃないかな。三山公幫の人数もだいぶ減ってこじんまりしてきたし、前みたいにはやりにくい。(50代, 男性)

老華僑が近代の中国に対する日本社会の変化に伴って社会進出し、新地以外に行動範囲を広げたことによって華僑の社会組織の勢力が低下した。さらに、近年目立つ日本国籍を取得する流れからも見て取れるように、以前の老華僑が持っていた民族意識の低下が進んでおり、今後は長崎華僑の社会組織の機能は希薄化していくことが予想される。

4 . 長崎華僑組織の変化

4.1 長崎華僑組織成立の背景

現在の長崎の華僑社会の構成員は、福建省出身者がそのほとんどを占める。そのため、福建同郷会や三山公幫など福建省出身者の団体を中心として活動する場合が多い。

戦後、華僑の組織団体は大きく変化した。まず、職業原理に基づく同業団体が大幅に減少した。その後は従来経済的な目的で組織された総会や公所や会館などが形骸化していった。現在長崎市には長崎華僑総会、華僑婦女会、三山公幫、福建同郷会、中華総商会、中華料理同業組合、長崎孔子廟歴代博物館、僑友会、長崎新地中華街商店街振興組合の計9つの華僑の組織が存在するとされていた〔王, 2001〕。しかし2012年から2013年に筆者が行った現地調査では、長崎華僑組織の現状は変わっていることがわかった。

中華総商会は、貿易商人の減少により消滅し、僑友会は同組織の会員が2005年に設立した「長崎吼獅会」へと中国獅子舞の継承活動を引き継ぎ、現在活動を停止している。長崎吼獅会は中国獅子舞の伝承だけではなく日本人との親睦も目的の一つであるため、中国人との血縁がない日本人も参加している。また、1905年に創立し、1988年に閉校となった時中小学校は、2008年、長崎孔子廟内の建物の一部で「長崎時中語学院」として復活した。そして第2章でも述べたとおり、2008年に「長崎新華僑華人協会」が新たな公的組織として登場した。

4.2 長崎華僑組織の現状

江戸時代には4つのサブ・エスニック・グループによって形成されていた長崎華僑社会は、明治以後、三山公幫以外の華僑の流出により内部構造を変化させた。長崎華僑社会全体の象徴そ

のものが三山公幫となり、このサブ・エスニック・グループは、実質的にひとつのエスニック・グループへと変化してきた。

長い歴史の中で、エスニック・グループの境界は維持されながらも、そこから長崎華僑の血と文化が長崎地域社会へ吸収されてきた。そうした背景の中で、新地中華街は華僑社会の核となる一方で華僑と日本人をつなぐ接点となり、華僑と日本人が共存するコミュニティを成立させた。そして2007年、新華僑が主体の新華僑華人協会という新たなエスニック・グループが誕生したことにより、長崎華僑の在り方に変化が生じている。以下の項では、現存する社会組織の中で、三山公幫、長崎華僑総会、商店街振興組合、長崎新華僑華人協会について詳しく見ていく。

4.2.1 三山公幫

3.2で述べたように、三山公幫は1899年に設立された相互扶助のための団体だが、崇福寺の信徒の団体としての性格も持ち、主な活動は崇福寺の運営資金の徴収及び年間祭祀行事である。現在では崇福寺の運営に協力してくれる者なら三山²出身者以外にも三山公幫に所属できる。

三山公幫は3.2で述べたとおり、自身が主催する結婚式や葬式において中国風のものを行わなくなった。長崎市麹屋町の中華料理店「慶華園」専務の楊爾賢さんからは、このような話を聞いた。

昔も「常識的に考えて日本社会にそぐわない」「今どき中国式なんて格好悪い」という意見はあった。けど、当時の三山公幫の総代は中国の伝統を守ろうという意識が特に強い人で、みんな彼に付いて行って中国式の式を続けていた。現在の総代はそこまで中国式にこだわらないから、みんなわざわざ中国式の式をあげることがなくなった。

現在は三山公幫の総代を含め三山公幫の構成員は日本国籍を取得している者もあり、中国にこだわる者が少なくなってきている。これからもこのような民族意識の低下によって、長崎華僑が守ってきた他の伝統が途絶えていくだろう。

三山公幫には輪番制の当番があり、王によれば2001年の時点では所属する家は約50軒であり、毎年8軒ずつ6年に1回順番が回ってきて1年間の崇福寺の行事の主催を受け持ったという〔王, 2001〕。しかし現在は約40軒の家が5年に1回当番を務める。年々檀家の数の減少のため輪番の回転が速くなっているうえに、参拝料や賽銭の金額も少なくなり、三山公幫では現在、資金の調達に頭を抱えている状態が続いているようだ。

4.2.2 長崎華僑総会

1945年に成立した長崎華僑総会は中国出身者の相互扶助組織であり、現在、長崎市に在住する華僑が軒数にして58軒在籍している。同会では中国籍の華僑しか総代になれない。また、在籍している新華僑はほとんどおらず老華僑中心の組織である。

20年ほど前まで、長崎華僑総会は花見や海水浴などの行事を行っていたが、現在は構成員の減少と資金不足の影響を受け、年に数回懇親会が行われるのみである。

三山公幫は崇福寺の管理をする者なら参加することができるが、華僑総会は総代に関する規約が存在する上にローカル性が強いいため、縮小の速度はより速いであろう。会員からは総代の国籍の規定を批判する声もあがっている。

4.2.3 商店街振興組合

商店街振興組合の目的は新地中華街の華僑の活動の中心地としての活性化である。「中華街らしくなること」という理念に協力的積極的であることが組合員資格である。領域は新地中華街の十字路に面している範囲のみで、面していない内側などは管理外である。現在約40店舗が同組織に加盟している。中国人と日本人の比率は1：1である。

4.2.4 長崎新華僑華人協会

長崎新華僑華人協会は、2007年6月24日に、長崎の新華僑の代表50人が立ち上げた組織で、中華文化の発揚、中日友好の促進、会員間の親睦と交流、会員の正当な合法的權益の保護を行うことを目的とする。現在120～130世帯登録されており、その中に老華僑も含むが人数は少なく、主に新華僑で構成されている。

親睦のための行事を積極的に行っており、花見、海水浴、室内運動会などをはじめ、一年間のうち多くの会を開いている。さらに同会は日本人との交流にも意欲的で、2012年12月には、長崎日中親善協議会と共同で親睦卓球交流会を主催していた。

4.3 組織間の交流

三山公幫と長崎華僑総会、長崎新華僑華人協会はそれぞれ日本人と交流しているが、一方でこれらの老華僑と新華僑の組織の間には多少の隔たりがあるように思われる。

長崎に根を下ろし生活をしている老華僑に対して、新華僑は本国に戻ったり県外に移動するなど動きが活発で、日本での暮らし方が老華僑と対照的である。また新華僑はいわゆるエリートと呼ばれる人が多く、近付きがたい印象を受ける老華僑もいるようだ。新地中華街外で仕事をしている華僑2世の男性2人はこのように話していた。

新華僑は老華僑を小馬鹿にしているんじゃないかと言っている知り合いもいる。私たちのことをチャンポン屋のおっちゃんくらいにしか思っていないんじゃないかって。(男性、70代)

老華僑は日本に住む中国人としてみっともないことはできないという意識を持って、もし店がうまくいかなくても、なんとかして店を潰さないようにしなくちゃと思う。でも新華僑の場合はすぐ店を閉めることができる。自分の国じゃないから商売がうまくいきそうだ、一儲けしよう、くらいにしか考えてなさそう。(男性、50代)

日本人と上手く生きていくための社会を形成してきた老華僑たちは、先祖の働きに誇りを持ち、

感謝している。そこに自分たちの日本での働きを理解していない新華僑が割り込んできたために、戸惑う老華僑がいる。このような事情が、老華僑と新華僑の間で積極的な交流が行われていない理由のひとつにある。

一方、老華僑と良好な関係を築いている新華僑もいる。新地中華街で雑貨業を営む新華僑の朱敏さんは、中国の大学を卒業後、長崎に留学し、卒業後2007年に長崎で事業を開始し、現在は新地中華街において2軒の雑貨店、1軒の中華料理店を経営している。

はじめは、新華僑の私は昔からの新地中華街の人たちに受け入れられないかと思っていた。でも商店街振興組合に入ったから老華僑の皆さんととてもやりやすい。

彼女の雑貨店の商品の仕入れは、70年以上続く新地中華街の雑貨店を営んでいる老華僑が手伝っている。その老華僑の紹介で朱敏さんは商店街振興組合に入り、他の老華僑や日本人とも交流している。新地中華街の雑貨店従業員の老華僑の女性に新華僑との交流について尋ねたところ、このように語っていた。

ここ（新地中華街）では老華僑も新華僑も深くつきあってる。元々は同じ国の出身なんだから、日本人よりも根強い絆がある。商店街の皆は元々は親戚同士。近くの店同士で結婚したりして、新地の中で親戚の人も多い。新華僑の人も同じ国の出身なんだから仲良くしてる。だから彼らの商売もうまくいってるんだと思う。（女性 50代）

彼女の話から、新地中華街は長崎の中心部にあるにも関わらず現在でも一種のムラ社会を形成し続けているということがわかる。福建から長崎にやって来て、同郷意識を持って新地でムラ社会を作り上げた老華僑はそこにやってきた日本人や新華僑のことを別の村から嫁いできた嫁のような存在として認識し、昔から共に生活を営んできた近所の人間と同じように、彼らにも特別な仲間意識を持って接しているのだろう。

5. まとめ

長崎の地域社会と同化・共生して生きてきた長崎華僑は、幫というエスニック・グループの中で祖先たちの働きに誇りを持ち生きてきた。彼らは時代の流れとともに失った中国らしさを取り戻すために伝統を創造し、現在は長崎の観光に貢献している。しかし近年、新地以外の日本社会へ進出する華僑が増加し、その影響によって組織の構成員である長崎老華僑の人数の減少、民族意識の低下が起こり、華僑の社会組織の役割の希薄化とその規模の縮小が進んでいる。

2007年には新華僑が立ち上げた組織も登場し、長崎の華僑社会に新たな流れを生み出している。老華僑は日本人と共に生きてきたが、その複雑な歴史の背景を持つことから、新華僑と上手く交流できているとは言えない状況である。しかし老華僑と日本人に加えて新華僑は、互いに協力し合い、新しい社会組織をつくっていく可能性がある。彼らがどのように協力してくかが今後の課

題のひとつであり、その解決は、老華僑の若い世代である3世、4世の手にかっている。そのような中で長崎新地中華街は、老華僑、新華僑、日本人の3者が交流する場として有効的に機能する可能性がある」と推測できる。

6. おわりに

現在、日中関係の悪化が叫ばれているが、このような社会情勢の中でも、長崎に居住する老華僑は昔と変わらずに日本人との信頼関係を崩さずに暮らしている。将来、日本と中国の関係が今以上に悪化する可能性があるうえに、長崎華僑独自の民族意識を持った老華僑はいつか存在しなくなることもないとは言いきれない。しかし、長崎という日本の地域社会で中国人が日本人と共生していたという事実だけは消えることがない。

今回筆者が聞き取り調査を行う中で、自分のルーツを知るために長崎華僑の歴史について熱心に勉強している老華僑にしばしば出会った。彼らが老華僑、新華僑、日本人関係なく長崎に住むすべての後世に老華僑と日本人が作り上げた長崎新地中華街の歴史を語り継いでいくことは、豊かな国際都市を目指す長崎にとって有益なことであろう。さらにこれまで協力して生きてきた老華僑と日本人の交流に、現代の中国に近い存在である新華僑も加わることで、長崎がさらに国際色豊かな街になっていくことを期待する。

謝辞

本研究では聞き取り調査を行っており、協力してくださった長崎市在住の華僑の方々の協力的には成り立ちませんでした。ここに記して感謝の意を表します。

註

- ¹ エスニック・グループとは、「国民国家の枠組みの中で、出身社会、上位社会及び他の同種の集団との相互行為的状況下でありながら、なお、固有の伝統文化とわれわれ意識を共有している人々による集団」のことである〔王, 2001〕
- ² 三山は福州内にある山のことであり、「三山蔵（隠れる三山）、三山現（現れる三山）、三山看不見（見られぬ三山）」という諺があり、「三山蔵」は泉山、羅山と玉尺山を指し、「三山現」は屏山、于山と鳥石山を指す。「三山看不見」は霊山、芝山と鐘山を指すものである。この三山は「三山現」のことを指す〔王 2001〕。華僑はこの地域一帯を三山と呼んでいる。

参考文献

- 阿部康久 1996 「長崎に留華僑・華人の就業構造の変化と居住地移動 - ライフヒストリーによる世代間比較を通して - 」『日本地理学会予稿集』50、pp.90-91
- 王維 2001 『日本華僑における伝統の再編とエスニシティ 祭祀と芸能を中心に』 風響社
- 張玉玲 2007 「観光地「中華街」の形成と発展からみる日本人と華僑が試みた「共生」』愛知淑徳大学論集・コミュニケーション学部・コミュニケーション研究科編』7、pp.163-176
- 譚璐美・劉傑編 2008 『新華僑 老華僑』文藝春秋
- 中村真也 「CraftMAP 日本・世界の白地図」<http://www.craftmap.box-i.net/> (2013年1月22日)